

尋常小學修身書卷二生徒用

檢定申請本

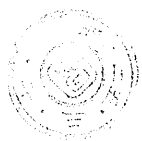
國文(教)
K120.1
25a
4
審(研)

K120.1

25a

4

尋常小學修身書卷二 生徒用



第一課	松平好房	第十四課	下野公助
第二課	毛利元就	第十五課	兄弟勉を射る
第三課	一本の針	第十六課	話々をきく心得
第四課	我々をどく	第十七課	石原やす
第五課	忠兵衛文次	第十八課	和氣清麻呂
第六課	入野谷村の樹	第十九課	范式と張助
第七課	若林強齋	第二十課	平澤某の話
第八課	大樺の話	第二十一課	蟹と猿の話
第九課	鳥さくと雀	第二十二課	前のつづき
第十課	猿利口	第二十三課	前のつづき
第十一課	畠山重忠	第二十四課	村上義光
第十二課	鄭確の腫れ物	第二十五課	路上の心得
第十三課	指さし		

尋常小學修身書卷二 生徒用

能勢 榮 撰

第一課 松平好房

松平好房といふ人は、をさなきころより、父母の方に向ひて、足をのばしたることもなく、父母より物をたまはりたる時は、わしいただきて、大切にし、



又用をいひつけられたる時は、つづいて、その事をたこなひたり。父母もいびやうきにかかりたる時は、かたはらにおて、よくかんばんやうし、

ドぶんもつねに、やうどやうをよくして、けつして、父母にうんぱいを、かくることなかりき。

孝は百行のもと。

第二課 毛利元就

毛利元就ある時、その子供をよびあつめ、これにつかねたる、矢をあたへて、



をらしめたるに、を
れず、よりて、又一
本づつ、ぬきとりて、
をらしめたるに、た
やすくをれて、
ばしの間、のこら
ずをりつくくぬ、
かくて、ろの子供に

向ひ、汝等たがひに、したくすれば、つ
かねたる、矢のやうに、もちあひて、力あ
れども、もしべつべつにはなるれば、
一本づつの矢のやうに、たやすく、人に
ろこねらるるがよ、といましめたり。
兄弟は一體一支なり、たがひにあひ
たすけ、あひすくふべし。

第三課 一本の釘

ある子が、くぎをろう
まつにするを、ろ
の父がいまゝめた
るに、「なにとやぐ
ぎの一本ばかり」と
いひてわらひたり、
父はかさねて「こ

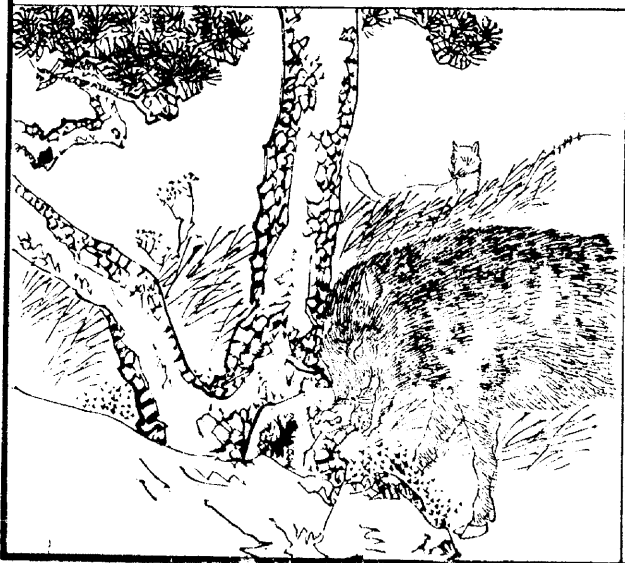


れ太郎よ、このくぎは、あたひもやすく、
いくらかもあるものなれど、よくかん
がへて、見る時は、なかなか、大なるもの
である、なぜかといへば、いかほど、ね
だんのたかひ、やりかたなでも、くぎ
のかはりは、できぬではないか、といま
しめをしつたり。

小事をかろんずるなかれ。

第四課 牙をとぐ猪井ノシシ

おのーくが、松のね
もとにて、きばをみ
がきわたる時、き
つね、ろばをとほり
かかりて、「オイお
の公、なんでろんな
に、かせぐのだ、マア

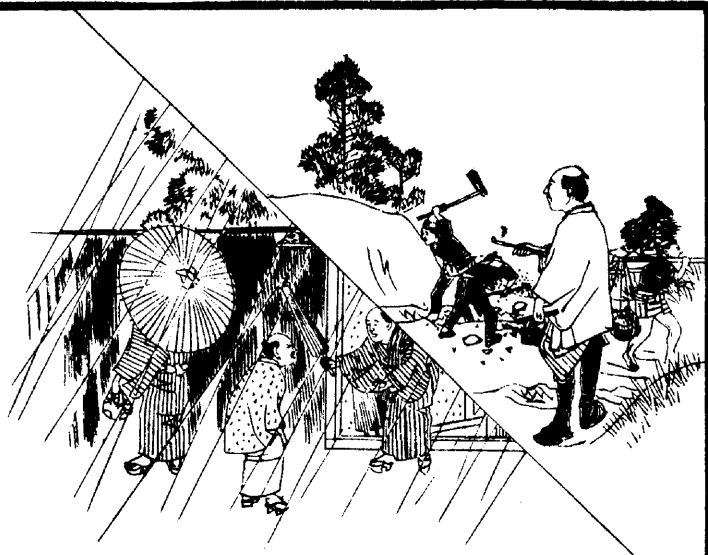


マアちつとやすみをさせ、とあらひな
がら、あざけりたれば、おのーくは、こ
とばはげしく、よけいなせわをやきな
さるなれうーや、犬のきた時の用心ヨウシンを
くもくないで」といひすてて、いよい
よするどく、みがきたり。

事前にさだまればつまづかず。

第五課 忠兵衛文次。

下總シモフサに忠兵衛チウベ文次ブンジといふ二人のトビ
 ふかき百姓ありき。忠兵衛は、つねに
 村内のみち、はくなどのやぶれをつく
 ろひ、ろのほか、あめ、ゆき、などふりて、
 わうらいのさまたげに、なることあれ
 ば、力をつくしてみちをよくしたり、
 文次は、人のすてんとする、ふるみのや、



やぶれがさなごを、
 もらひうけて、に
 はか雨の時に、たれ
 かれのわかちなく、
 みちゆく人に、ほど
 こしたり。

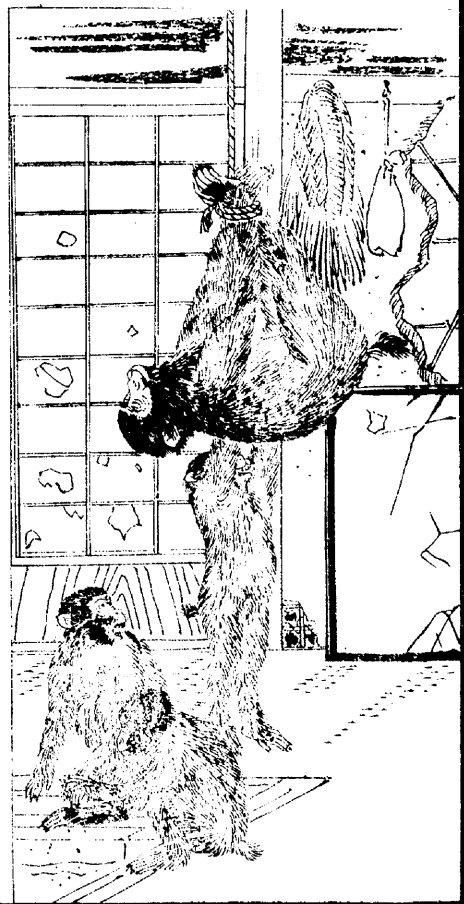
善をなせば心た
 のづからたのし。

第六課 入野谷村の猿

信濃の國伊奈郡入野谷村にあるれう
 うあり、冬の日れうにゆきて、一匹の
 大きるをいころして、夜家にかへり
 が、明日皮をはぐに、ひびこほりては、よ
 ろしからずとて、これをいりりの上に
 かけたきたりしに、夜なかのころ、二
 三匹の子さる來り、手をいりりにあぶ

りて、大
 ざるの
 わきば
 らをた
 さへ、か
 はるがはる、うのきずを、あたためけれ
 ばれうしも、これをあはれかりしとぞ。

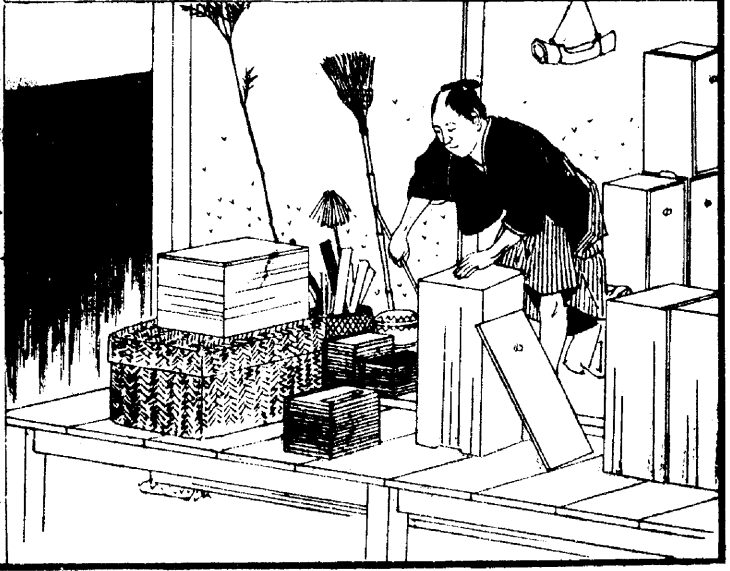
人孝ならざれば禽獸にたどる。



第七課 若林強齋

若林強齋キヨウサイといふ人、をさなきころ、あ
る年のくれに先生の家へせいぼのれ
いをのべにゆきたり、
日先生の家、すすはらひにて、大いにと
りこみおたれば、強齋も、ろのまま手
つだひて夕がたわが家にかへり、
かへりてのち、母ろのきもののはりの

少くやふれたるを
見て、はぐめは、いぶ
かりて、どがめたり
しが、強齋が事の
よくをのぶるをき
きて、よくた手つ
だひをしてきた、さ
ういふわけなら、な

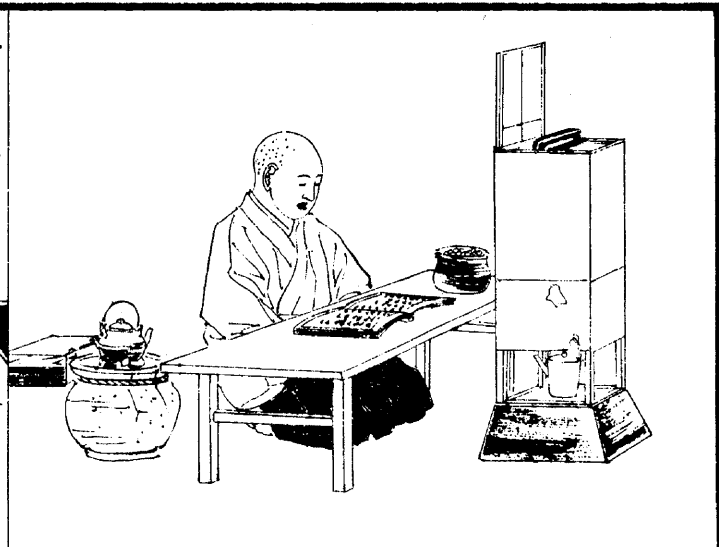


にもどがめる事は無い」といひて、ゆる
したり。

道のをしへをうけたる師はうの思
ふかきこと君父にひとし。

第八課 大椿ダイタマシの話。

むかゝ九州に大椿ダイタマシといふ人あり、わ
かきころふかく學もんに志したれど、



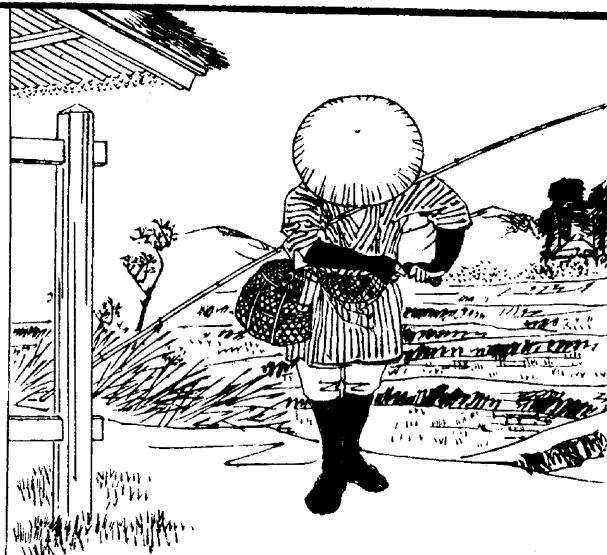
このころは世に書
物少くて、ふるさと
にては、まなびがた
きゆゑ、はるばる、
常陸ヒタチの國までゆき
てまなびたり、ろ
のうちもとの金
も、つきはてたれば、

ある人より、めぐまれたる豆一斗を、ま
 い日、一にぎりづつ、あぶりて食ひおた
 り、かくて五十日ばかりをへしに、今
 ははや、いのちをつながんみちも、な
 かりゆゑ、ふるさとにかへりて、や
 うやうに十五貫文のぜにをばて、ふ
 たたび常陸の國にいたりて、つひにろ
 の業をとげたり。

勉強すれば成らざることはない。

第九課 鳥さしと雀

鳥さし、一羽のすずめをさして、こゝに
 つけたる、かごに入れたれば、すずめ
 あはれなるこゑを出して、我をはなた
 ば、我、我が友を、いざなひ出さん、とい
 り、されど、鳥さし、ろのいつはりなら



るきか、手前は、まことに、友だちにふく

んことをうたがひ
て、なぐりとひくに
まことなり、とこた
つくゆゑ、鳥さく
ことばをあらため
て、ハハア、うれでは、
ほんまに、つれて來

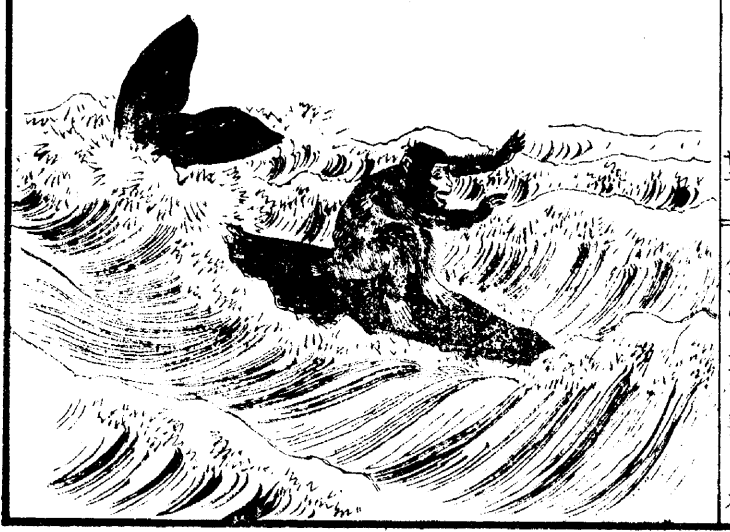
んせつなやつだ、いかしておけぬぞ、と
いひて、すぐにたかの急にしたりと
いふ。

人に災をたはしめんとすれば、却り
てみづから災をまねく。

第十課 猿利口。

くぢら、水にたぼれたる猿をたすけ、ド

ぶんのせなかの
せて、きーちかくま
で、来りー時、ふと
猿のうまれをたづ
ねーに、猿こたへ
て、わたくしは東京
ものでござる」とい
ひたるより、くぢら



ら、いろいろ東京のことをたづねたれ
ど、知らぬことばかりにて、猿のいつは
り、あらはれたれば、くぢらはらの中
にていやになり、ごんをほらふきをた
すけるは、むねきなことだ」とたちまち
水にもぐりーゆゑ、猿はつひにたぼ
れて、死にたり。

口はあざはひの門。

三浦の海物語 卷二 廿二 全洋堂書局發行

第十一課 畠山重忠

波多盛通といふ人、やうぐんといひつけをうけて、人をとらへし時、畠山重忠力をうへたり、盛通はうびをうくる時、日ごろ盛通をにくめるもの、口を出して、あれは盛通一人のほねをりではない、といひしかば、やうぐん重忠をめぐてたづねたるに、重忠「わ

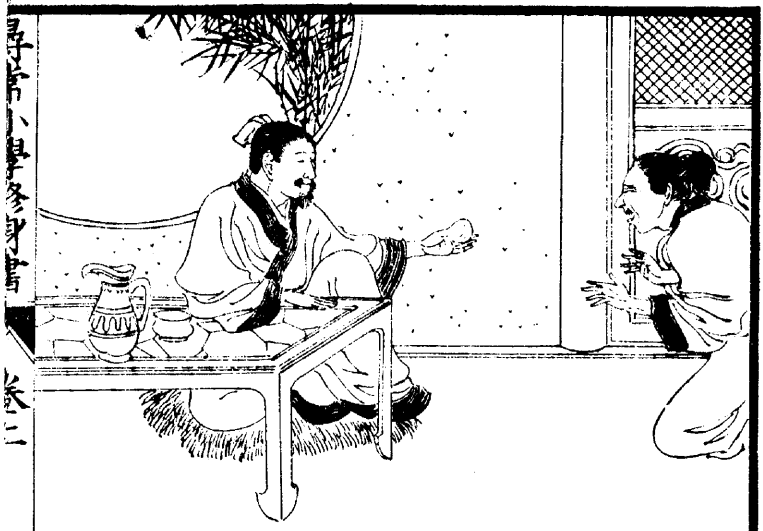
たくくは、よくもろんどませんが、人のうはさを、ききますれば、全く盛通一人のほねをりとぞんぜられます、とこたへたれば、盛通をろりたるもの、大いにはぢ入りたり。



利は人にゆづり、害は己にうつけよ。

第十二課 鄭瓘の腫れ物。

支那に鄭瓘といふ人あり、ある時、左の手の大指に、あはつふほどのはれ物、出きたり、はづめは何ともたもはず、すててれきゝが、ゝだいにはれあがりて、指の太さ、一にぎりほどになりて、



いたみも、たつがたければ、たどろきて、いゝやに見せゝに、はや手たくれとなりて、たやすくはなほらず、つひに三月ばかりをへて、やうやくなほりたり、

鄭瓘これより、あゝき事は、何事によらず、早くなほくたり。

こうくわいは、ろこつより生ど、
太なんは、びさいよりたこる。

第十三課 指さし。

多くの人の、あつまれる中にて、みだりに、指をさすことなかれ、ろの指さき

に、あたれる人、甚こころよからぬものなり、むかゝ、ある人、くばおにて、はるか、へだたりたる、醉人スヰジンのくるひかたれるを指さして、つれの男にくらせたるを、かの醉人きづきて、大いにいかり、すぐにこなたに、あばれこみて、いたく、わづらひとなりたる事あり、すべて人に向ひて、指さしするは、こゑを出さ

ぬ、わる口と知るべし。

第十四課 下野公助

下野公助は父を武則といふ、うこんの
ばばに賭弓のありし時、申りあはく
て、人にまけたり、武則大いにいかりて、
人中にてむちうたんとせしを、公助は
にげもせず、ふしてどふふんに、うたれ



たり、或る人これ
をふしぎに思ひて、
ろのゆゑをたづね
しに、公助こたへ
て、我が父は、年た
いときみどかになり
ましたゆゑにぐれ
ば、きつとたひかけ

て、つまづきませう、それがきづかはい
うて、うたれ居りまゝした、といへり。
わやの意には、さからふべからず。

第十五課 兄弟鳩を射る。

むかゝ或る武家に、兄弟二人の子あり、
二人とも、かくこくして、父はいづれに、
その家をつがゝめんとも、さだめがた



きゆゑ、いつかろ
のぎげいをため
て、これをさだめ
と思ひれこゝたり、
かくて、或る日、父
はこの二人をつれ
て、野べにあるび
に、はるか、あなた

のくさむらの中に、鳩トビのあうび居るを
見て、よきをりをりと思ひ、二人にい
ひつけて射させたり、されど、兄も弟も、
かねてより、父の心をはかりしれるゆ
ゑ、兄は弟に、弟は兄に、あてさせんと
思ひ、ひとしくこれをいふんどたりし
かば、父はうの家さんを二つにわけ
て、兄弟にあたへたり。

兄弟の間は物をあらうはず。

第十六課 話しをきく心得。

人の話しをうはのうららに、ききながし
て、あたりの物をもてあうび、又は、わき
目をつかひなど、すべからず、これは
向ふの人に、たいして、甚ぶれいなるの
みならず、大切なる話しも、我がむね

にたぢぢずして、大へなる損なり。

人に向ひて、のび、あくびするは、もつともよからぬ事なり。もし人より、此のやうの事を、せられなば、たのれも甚こころわるかるべし。人とても、また同ト事なり。

他人と話しする時、よこあひより、口を出すべからず、人の話しのことゝををるは、よほどのふれゝなり。

第十七課 石原やす。

石原やす女は三河カハの國小島コジマ村の人なり、父は早く死して、一人の母をやりなひ居けるが、家まづしくして、女の手にては、思ふやうに、孝行とどかさるゆゑ、ちかき村の富める家にほうこ



うし、給金、又は、衣物
 の手あて金までも、
 母に送り、ひまあ
 れば、家にかへりて、
 たきぎなど取りた
 き、万事、母の心はい
 なきやうになせり、
 しかるにはから

ずも、母たもき病ひにかかりければ、
 いとまをこひて、家にかへり、村内にて、
 日かせぎをなし、わづかばかりの錢を
 得、母の好める物を、かひととのへて、孝
 やうをつくりたり。

父母につかへて、よく其の力をつくす。

第十八課 和氣清麻呂。

昔、ゆげのだうきやうといふ人あり、
 時のみかどの御心を以て、太政大臣と
 いふもつともたうときよくにのぼ
 りたれば、あがままなる心、くだいにつ
 のり、つひに天子にかはりたくとのあ
 べき心たこり、使ひを宇佐八幡宮にや
 り、神の御心をうかがひたり、この時、
 この使ひにゆきたるは、和氣清麻呂と



いふ人なり、此の
 人、いたりて忠義の
 心ふかかり、ゆゑ、
 宇佐よりかへり
 て、神のみことのり
 をまをしあげて、
 んかのみにて、かか
 るあしき事を思ふ

ものあらば、すみやかにこゝろすべし」といひ、ゆゑ、天位はつひにけがれざりき。

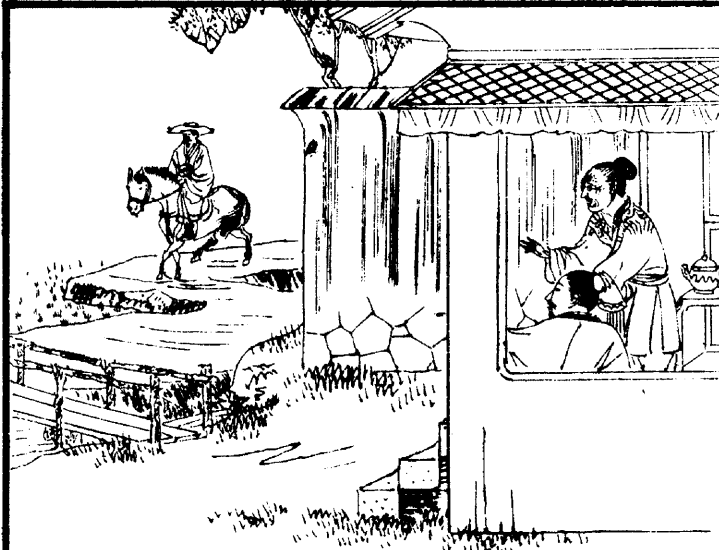
臣の分は、ただ君に忠なるにあり。

第十九課

范式と張劭（カヤウ、セウ）

支那の後漢（ゴカン）の世に、范式（ハンシキョウ）張劭（カヤウ）といふ二人あり、常に、たゞしく交り居りしが、

ある年の春、范式は此の秋の何日にかへるべし、とやくろくして、みやこの方へ出立つたり、さてその日になりて、張劭は、ちろうのしたくを、はじめてゆゑ、母親「ここからみやこまで、千里もあるに、やくろくのどほりかへられるか、どうだか」ときづかひに、張劭は、出立つの時、かたくやくろくしてま



したから必カナラかへる
 でありませう」とま
 だいひもをはらぬ
 に、范式馬カネシキウマにのり
 て、かへり來れり、
 母親大いにかんく
 んして、我が子は實
 によい友だちをも

つた、とよろこびたり。

朋友に交るには信を貴ぶ。

第二十課 平澤某ヒラサハの話。

平澤某ヒラサハといふ人、ある時主人の用向き
 にて、他に出でたる途中、ある家の二
 かいより、つばをはきし者ありて、その
 禮服レイブツにかかりかば、其の僕大いに

いかり、は
 せあがり
 て、切りて
 すてんと、
 さわぎ立
 つを、某
 はかたく
 ごとめ、用意の衣物を出して、きかへた



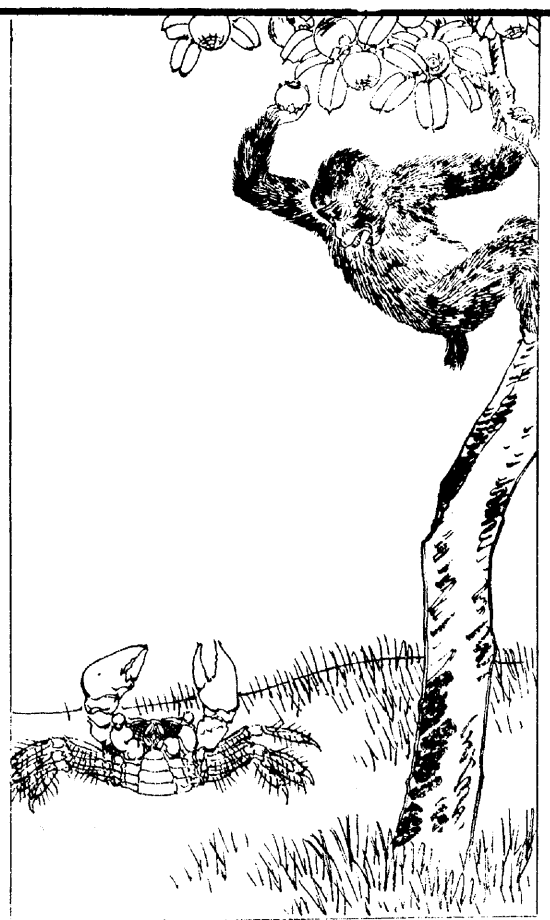
り、ろの家の人人これを見て、一同出
 でて、わびけるに、某は少くもどがめず、
 ただ「この後、御きをつけられよ」といひ
 て立ちさり、あとにて、僕は何故だん
 なは、あれほどの事をかんにんをされ
 ましたか」とたづねくに、某は「イヤ今
 日は、大切なる公用があるから、わたく
 し事に、ひまどるわけにはゆかぬ」とい

たへたりとぞ。

堪忍すれば、あざはひなす。

第二十一課 蟹カニと猿の話。

昔、猿が蟹のむすびをもてるを見て、
「おい蟹公、これの大木の、桺カキのたねをや
るから、ちのにぎりめしを、くれなにか、
とねだりに、蟹カニようちせしゆな、



猿は、すぐちのむすびを取りて、うち
くらひ、
桺のた
ねをな
げだし
たきて、
山へか
へれり、蟹はちのたねを、にはさきへ

まきたきりに、りっぱにうだち、及びた
くさんなりゆゑ、毎日なかめて樂
しみ居たり、しかるに、或る日、猿來り
て、「わたくしが取つてあげませう」とい
せつらく、木に上り、甘さうなのは、自
分がくひ、しふさうなのは、蟹になげつ
けたきて、また山へかへれり。

よくに從へば、これあやふし。

第二十二課 前のつづき。

蟹は、さんざんに、きずをうけて、木の下
に、ふし居たるを、こんいの蜂ハチと卵タマゴと
が見て、「どうしたのだ」とたづねければ、
蟹は、足こゝをさすりながら、猿のわ
るさを、くはしく物語れり。

蜂は、卵とかほ見合はせて、「こりや、きき
ずてには、ならぬわけだといへば、卵は



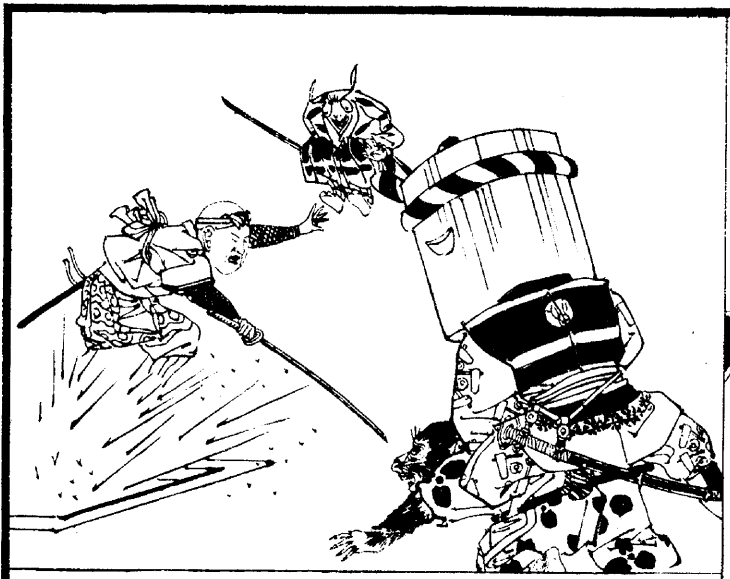
かさま、さうだ」とさ
つろく、ひやうぎに
かかりすが、ちや
うど、心やすき立タチ白ウス
が、来キかかり、大きな
なりにて、立ちあが
り、「わが友だちを、あ
なごつた山猿め、こ

んど来たたら、生イカくちやたかぬ」と十分に
うけ合ひたり、かやうの時に、朋友の
いんせつなるは、どつにたのもくきも
のなり。

命は義によりてかる。

第二十三課 前のつづき。

猿は、十分蟹をあざむきすが、なほ、生イカり



て居るゝぶき柿に、
きがのこり、二三
日へて、再来りゝに、
蟹はどこにも見ぬ
ざるゆゑ、先づ茶に
てもものまんど、ざゝ
きに上り、いろりの
はたへ、よるや否や、

灰の中より、てつぼうの如き音して、
卵がとび出で、猿のはなばゝらをうち
くちきたり。
猿は、大いにたどろきて、オオあつあつ、
といひながら、だいどころの、ぬかみろ
を、やけどにぬらん、とかけよりゝに、
みろ桶の間より、蜂がとび出で、猿の目
玉をつよくさゝたり。

猿は、いよいよ、たどるきて、「オオ、いたいた」といひながら、逃げ去らんとするところを、待ちかまへたる立白が、かものの上より、ちかちかかけて、つひに猿をうちころしたり。

禍福門なく、ただ人の招くところ。

第二十四課 村上義光

昔元弘の頃、村上義光といふ人あり、その子義隆と、護良親王に従ひて、吉野の城にこもりしが、賊軍四方よりせめ來り、官軍大いにうちまけ、うち死にするもの、かぞ知らず、親王さへも、あやふく見ゆたりゆゑ、義光、親王の前に、ひざまづきて、此の上は、御身代りに、うち死に仕るの外、あらず、あはれも



つたいなくも御よ
ろひをたまはり、君
には、早くおちさせ
たまへとひたすら
に、すすめければ、
親王も、今はせん方
なく、ろのことばに
従ひ、なみだを流し

て、おちさせたまへり。
かくて義光は、其のよろひをきて、賊を
あざむき、いさましく、うち死にしたり、
親王は、義隆と共に、おちたまひしが、
途にて、また賊に出あひたりしも、義
隆ひとり、ふみとどまりて、うち死にし、
親王は、其のひまに、おちのびて、高野山
へ入りたまへり。

君につかへてよくろの身をいたす。

第二十五課 路上ロジヤの心得。

往來にて、馬車や、荷物をはこぶ人、たいをくみたる兵士などにあはば、必よけてトホ通すべし。

馬車、人力車などの「ハイハイ」とこゑをかくるとき、きこぬふりして、あきつ

さけぬは、甚あゝきことなり、これは向ふのめいわくのみなならず、第一自分が、大けがをすることあり、たとひ、こゑをかけられずとも、早くこなたでさくトホるやうにすべし。

大ぜい、つれだちて、道ミチを行くときは、成るだけ、一列イツレツに、ならばぬやうにすべし、往來にて、人と話しをすることあら

尋常小學修身書 卷二 六十三 金澤堂書籍會社

ば成るたけ道のかたはらによるべし
しからずは他人の妨げにもなり且牛
馬などにふれて思はぬけがをす
こともあるべし。

尋常小學修身書卷二 生徒用終

明治二十五年二月廿五日出版

原價金八錢

著作者

能勢

榮

發行者

原

亮三

郎

印刷人

日置

九

郎

發兌

金

港堂書籍會社

社

大買捌所

金

港

堂

版權所有

東京市小石川區竹早町十七番地

東京市日本橋區本町三丁目十七番地

東京市日本橋區本町三丁目十七番地

東京市日本橋區本町三丁目十七番地

大阪市東區南本町四丁目三番番屋敷

宮城縣仙台市國分町五丁目百三十一番地

